

肘歴通信 第十號

「戊辰戦争 深沢野合戦」のこと

～庄内軍は七百騎以上の兵士にして、
皆々スッポードンブクロを着用す～

慶応四年の戊辰戦争。

庄内藩・会津藩を中心とした東北諸藩は、新政府軍に対抗する「**奥羽越列藩同盟**」を結成、北部政権の独立と新政府打倒の為、戦いを始めました。

開戦当初、

新庄藩は、新政府軍と共に庄内藩へ侵攻するも返討ちに合い、その後「**奥羽越列藩同盟**」に加わります。

新庄藩が同盟に参加した直後、そのことをまだ知らぬ最前線では、庄内軍が「薩長の兵が肘折に居る」という情報を得て、精鋭「**新徴組**(新撰組の前身)」が肘折温泉へ向け侵攻を開始。かくして、深沢野で**新庄軍**と**庄内軍**が激突しました。



肘折では、

長南熊蔵・原甚太郎・斉藤佐次兵衛が鉄砲手として従軍。

当時、唯一の橋「永代橋」の橋板を外し、女子供は豊牧に避難、数人の留守居以外は付近の山林に身を隠しました。



合戦のあった深沢野

新庄藩が鉄砲の口火を切り、合戦が始まったものの、庄内軍新徴組は強く、あっという間に新庄藩は敗走撤退。

新徴組は肘折へ向け進軍し、永代橋の袂まで来ると、合戦で捕虜となっていた斉藤佐次兵衛を使者とし、

「これ以上の戦意は無い、

橋の修理代と宿泊費を支払うので軍兵を休ませてほしい。」

と内意を伝えると、組頭の横山太兵衛と先代組頭の高山武右衛門が紋袴に着替えて出迎え、「焼き討ちをせず、住民へも決して危害を加えないでほしい」と懇願、山林から燈明を持った住人が続々と現れて、橋板を直し、肘折温泉に庄内軍が進駐しました。

翌日、肘折温泉で講和会議がもたれ、

肘折は再び新庄藩領へと戻ったのでした。

肘折歴史研究会